



昭和54年度夏期研修会

## 未来に生きる音楽教育(1)

三善 晃氏

●54年8月28日 第一生命ホールにて

### ○初めに

今日ここで、色々な意味での現場の問題をお話しして、それが実際に、どういう具合の未来を展望していくべきなのか、という事をお話したい。その為に乗り越えるべき課題は何か、或は成立せしめておかなければならない諸条件は何かという事も出てくると思います。それらを、みなさん方が、個々に御自分の現場にもどって、その現場に即して、解決して行く参考にして頂きたいと思います。

### ○音楽における一般教育と専門教育

教育の話をする時に、今までによく、一般教育と専門教育という事を、分けて言われすぎていたように思います。それは確かに、分けて考えなければいけない所もありますが、いつまでもそれにこだわっていると、日本の現場に合わない気がします。現在では、一般教育、つまり公立の学校等の義務教育の中で行なわれる音楽教育と、それ以外の場所でやっている教育とを区別することが、もう出来なくなっているのではないのでしょうか。

小学校の1クラスに5、6人は必ずピアノを弾く人がいるし、どんな高校にも大学にもギターはあるし、フォーク、ロックをやる人がいます。我々が子供の頃は、ピアノを習っている事が特殊だったから、分けて考えていてもよかったのだけれども、現在は違います。現に、音楽大学から、毎年何万という卒業生が出ていきますが、その人達全てが、プロの演奏家や音楽家になる訳ではありません。ならない方が多いのです。

### ○現場における問題点

これだけ音楽が広まった中で、まず現場に立った1つの問題点は、みなさん方が教えている子供達は、一体どうなるのか、ということです。ピアノも弾けるし、チェロも弾ける。クラシックも好きだし、ジャズも好きだ。そういう人が増え、音楽会で楽しむという事は、確かに文化圏の1つの営みの現れで、大へん良い事です。しかし、そうなってきている元の所に問題はないのでしょうか。

専門学校にも多勢の生徒が入ってきて、層が厚くなってきましたが、その人達が、高校、大学進学が近くなった時に、自分の人生を考えてみると、自分が音楽をやりたいと始めて来た訳ではなく、事の発端は、お母さんが、楽器をやらせてみようという事で始まった。何となくやっている内にうまくなり、それなら、音楽学校に入ってみようという事で入ってみる。或は、専門の教育を続けていく内に、引くに引かれなくなり、その時に、一体自分は何になるのかと、自分の人生を子供自身が考える時に、大へんな問題にぶつかる訳です。厳しく追求しようという責任感の強い人程、この事は重大な問題として出てきます。思い悩んだ末に止めていく人もいますが、その結論が拙速でない限り、それはそれで尊重しなくてははいけません。がしかし、その元は一体何なのだろうかという所に、今、日本の現場の問題があると思います。未来に音楽人口が増える事は良い事だし、文化圏の営みがそこにあるという事が展望できるとして、しかし、どうしてそういう事になるのでしょうか。

### ○情緒と情操

思い当たる事に、文部省指導要領というものがあリ、それは、一般の義務教育で使う検定教科書の基礎、つまり、国の文教政策です。その音楽編に、音楽をやる目的として、①音楽性(創造性)を養う、②情操を高める、という事がありました。古い言葉に、情操教育というのがあり、端的に言うとおけいこ事をさせるというのがその子の情操につながると、大して検証もせずに信じてきました。私は、音楽をやる事と、情操を高める事とは、全く直接の関係はないと考えています。

「情操」と似た言葉に「情緒」という言葉があります。情操教育という事を軽々しく口にする前に、教育する側の責任として、或は大人として、子供に対する義務として、どういう事なのか考えておく必要があります。「情緒」とは、人間の心の基本的な状態を言います。湖にたとえるならば、澄んだ豊かな水が満ち足りているような場合に、情緒が安定しているとか、充足しているといえるのです。その「情緒」が満ち足りていた場合に、「情操」というものは発揮される能力なのです。情操

は、辞書に「純粹なもの、美しいものに素直に感動する心」とありますが、そういう心の能力なのです。全ての子供は、情緒が満ち足りていれば、必ずこの情操という能力を発揮するのです。情操という能力を発揮したから、その子供は劇的に大きくなれたわけです。ですから、「情操」というのは、高めるものでなく、全ての人が持っており、それを発揮させるものが「情緒」の安定度なのです。つまり、情緒が安定して初めて、その子供は、周りの何ものかに積極的に関心を示し、参加していくのです。何かむずかしいものがあれば、それを解こうとする、自分でそれを征服しようとする、そういう能力が情操なのです。それは、潜在的に全ての人が持っていますが、情緒不安定の場合には出しにくいものです。

子供が、主体的に興味を示し、その興味が自分の中で培われて行く、その対象は何であるかはわからないけれど、必ずあります。それがピアノや音楽であった場合は、ピアノを叩くのが好きだったりする事に現われ出すのです。ところが、そこまで見ずに、もしかすると情緒そのものが満足していないのに、大人が、「情操を高めるのにいいし、将来楽しみが多いだろう」と軽い気持ちで、おけいこを始めさせる。また、情緒が安定していた場合にも、その情操が、音楽に向いているかどうかという事を、真剣に見ずに始めたとなると、軽い気持ちで始めたはずが、今度は、親の方に競争原理等が働き、厳しい気持ちになってしまうのです。子供にとって、情操がそこまで十分に出るように整っていないのに、無理にやらされるのは、大へんな悪循環になります。そして、ともかく続けてしまったからというので、ピアノを止める時期というのに、本人が大へん思い悩むことになり、精神の方に病気が深くなることになるのです。

### ●音楽における未来の問題

日本で、音楽は、大へん盛んになっているように見えますが、本当に音楽が人間の営みとして愛されているかと言うと、このままではそうは行かないような気がします。未来の問題として、それではどうすればいいのでしょうか。

### ○内的現実について

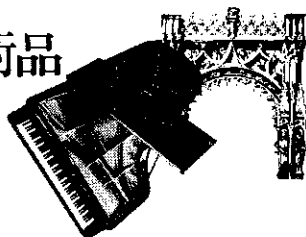
幼児の心理学等で、よく「内的現実」という言葉を使います。それは「1人1人の人間が、自分の体の中に、実感を持って体得している何ものか」という事です。こういう例があります、あるピアニストの友人が外国に留学する時に預った2人の少年に合同レッスンをし、いつも同じ曲を与えていました。ある時に、カペレフスキーのソナタを与えたら、1週間後にA君は評読みをしてきましたが、B君は何もやって来ないで、「これは音楽じゃない」といったそうです。問い正してみると、B君の家庭は大へん教育熱心で、音楽というのは「占典からワグナー以前位まで」という環境で、近代、現代等はほとんど聞かせていなかったのです。そこで何回か(14回)弾き、聞かせていく内に、少しわかり出し、やる気が出てきましたが、彼の内的現実としての音楽は、ワグナー以前に止まっていたのです。

そこで、一番大切な事は、「内的現実」を掴まなければ、教育は始まらないという事です。仮に自転車を見たこともない子供達に、力学を説明しようと絵を書いてみた所で無理な話で、自転車を実際に乗らせてみて初めて、自転車の力学という教育が始まるわけです。一般論として、教育というのは、個々にある内的現実を元にして、これを広げていく、これを手懸りとして深めたり、広げたりする事から始まり、そこに終るのではないかと、私は思います。

### ○大切にしたい内的現実

内的現実を伸ばす為に、親や先生が、どれ位努力しているか、という事を考えさせられた事があります。私の子供が通っている幼稚園で、一番、子供の気持ちがわかり、子供に人気もあり、母親たちに理解のあるアドヴァイスしてくれる先生がいて、その先生だけが、あらゆる園児がかけ寄ってくる時に、ただの挨拶の時でも、必ずしゃがんで、子供と同じ日の高さになって、挨拶してくれるそうです。それは自然な努力の現れでしょうが、子供の内的な現実を掴むということは、その人の身にな

格調高い音の芸術品  
デアパソン



DIAPASON

浜楽商事株式会社

本社 浜松市寺島町200番地 丁430  
☎ <0534> 52-1557  
仙台営業所 ☎ <0222> 23-3181  
東京営業所 ☎ <03> 379-1371  
浜松営業所 ☎ <0534> 54-2131  
名古屋営業所 ☎ <052> 962-2966  
大阪営業所 ☎ <06> 271-7846  
福岡営業所 ☎ <092> 531-4031

るということであり、とてもむずかしい事です。しかし、それをしなければならぬと思うのは、例えば、ピアノを始める3、4才頃は、目よりも高い所に鍵盤が並んでいて、立っていても実際には見えません。そんな巨大な物を、今のみなさん方は想像する事ができますか。そんなものを相手に何かしようとする子供の目の高さに立ってみないと、いくら椅子を高くしてピアノを弾かせてみても、大人の思うように行くはずがありません。

### ○内的現実の正しいとらえ方とは

「内的な現実を育てていく」という事で、私達は、日本の現場の人間として、大事な経験をして失敗した事があります。子供が喜ぶ事、子供の生活体験に即した事は何かと考える時、例えば、私達が子供に与える曲は外国の舞曲等で、日本の現実とあまり合わない物が与えられていて、いつも、それが額縁に入って、よそ行きになっているという事がありました。かつてこの事は、終戦後、教育現場の一般的な大問題となりました。例えば、一般教育の音楽の時間に、誰もものってこなくて、先生がイライラする。しかし、検定教科書を取り上げなくてはいけないので、一生懸命やっている……。これでは全然教育に身が入る訳がないのです。小学校で、一番私が感じる事は、幼稚園において、自由な方針の中で、替え歌をやったり、のびのびとした音楽教育を与えられた子供達が、小学校に入ると、だんだん音楽が嫌いになり、高学年ともなると、音楽なんて、いつ聴いたかも覚えていない人も出てきます。つまり、子供達がせっかく自分達の元として持っている好きなものを、違うものに合わせる様にと枠を作ってしまうということなのです。子供達は、どら声でがなったりするのが好きなのに、それをやらずにきれいな声で歌え、音が違う、という具合になって行くと、全くつまらないものになってしまうのです。

そういう意味で、さっき言いました、現場としての大きな教訓的体験というのは、「教育の中に生活単元を入れよう」という事で、「縦り方教室」から始まったものです。それは、ともかく身边にあるものを捕えて、そこで算

数を、国語を、教えようというものであり、音楽もそうすればいいという事になり、子供達が今一番、何が好きかを調べたのです。ある所で、教室では全く歌わないのに、外で「とんこ節」を歌っていたので、教室でも取り入れたら、大乗りに乗って、学校中大騒ぎになり、それだ、これだとやったのですが、長続きしませんでした。何故かという、それは、子供達の内的現実には確かに触れていましたが、内的現実を伸ばしたり、そこから発展させたりするという、知恵に欠けていたからです。折角、この様な体験があったのに、それは今もって生かされていないのです。

### ○内的現実を伸ばしていくには（その1）

それでは、1人の子供の可能性としての内的現実があれば、どういう具合に伸ばしていくかという事には、教科書の問題が大いにあります。一般教育の場では、この順番にやらなくてはならないと決められている、難易度があります。大人が決める子供にとっての難易度というのは、私は合っているものを探す方が、難しい位だと思います。子供は何でも自由に聴かせれば、交響曲でも、弦楽四重奏曲でも、子供なりに解かるはずだし、それが音楽の良さです。5才の子供でも、お年寄りでも、同じ年代が同じ会場で聴いても、各々が違った聴き方が出来るという事が、音楽の素晴らしさでしょう。「ピーターと狼」を聴いた園児達は、覚えてしまっ、自分達で考え出した劇を楽しんでいるのに、ついこの間までの指導要領では、小6になるまで、それを聴いてはならないという事でした。

### ○内的現実を伸ばしていくには（その2）

一般教育がその様だとして、それでは、ピアノのレッスンはどうかという、ピアノの教則本というのも狂っている様な気がします。例えば、パイエル等、初歩の教則本は、全音符から始まるものがありますが、4つ数えてから次に移るというのは、子供には大へん合わない事だと思います。音がメチャクチャになっても、ともかく、

楽器・レコード

## タカノ楽器

(浜通り支部のお世話をしております)

〒975 福島県原町市栄町3の16  
TEL 02442-2-3158

ピアノ・エレクトーン・オーディオ

## ハタ楽器

(横浜支部のお世話をしております)

〒226 横浜市緑区鴨居町477  
TEL 045-934-2468

始めに叩くという事が、巨大な楽器を相手に立ち向っていく幼児にとっては、一番そげん的な係わり方でしょう、その時には、どんなリズムも出来る、どんなリズムも許されるのです。それは、少なくとも全音符ではありません。そういう好きなリズムはやらせないで、後回しにし、難しい苦痛な事を、えんえんと毎週先生に叱られてがまんしなければならぬから、その度に情緒が剥奪されてしまうのです。発展させていく為には、大人が決めた尺度で、子供に対しての難しさ、易しさの段階を押しつける事よりも、子供の肉体や、子供の情緒や、子供の発揮しようとしてある情操の対象を、大人の側が考察する事が大切で、その土台の上に、その次に何が来るかを教えなくては行けないと思います。

### ○内的現実を伸ばしていくには（その3）

数学と音楽の大きく違う点は、数学の場合、一段段階をはずすと、その次には絶対上れませんが、音楽は、その時にそれなりに解っていれば、それで良いのです。その時に、大人が考えるだけの事を全部わかる必要はなく、むしろ、大人が言おうとしている事は、歪んだ狭い事かもしれないし、子供は、もっと別な事を解っているかも知れないのです。子供なりのわかり方を、もう一度教える側が、洞察し直さなければならぬと思います。音楽は、らせん型の横に回っていく輪のようなもので、その次の曲の輪のところにも、前と同じ点がきています。1つの音楽が取り残した事は、その次のところで、またわかったりします。1つの音楽が好きになったら、そのどこが好きなのか、リズムが好きなら、同じリズムや、そのリズムを発展させたものを増やしていくという風に、内的現実を手懸りにして、色々な方法で、それを広めていくという事は、確かにむつかしい事だと思います。しかし、少なくとも音楽というものはそういうものだから、そうしなければならぬという気持ちを、今、我々が持っていないと、子供達はかわいそうだと思います。

それから、「洞察する」という事が先程出てきました

が、これも大変むつかしい事だと思います。それは、子供には、いくら言ってもわかっていないのか、そうでないのか反応のない子もいます。しかし、子供の理解の仕方というのは、すぐに現われるとは限らないのです。表面に現われているのだけを見ると、水平線をたどっていて、全く進歩がないように見えます。そこで先程の、カバレフスキーを14回弾いた事を思い出してみるとわかるように、子供というのは、ある時突然に、垂直に言っただけの質を必ず飛躍するのです。大人は、言った事がすぐに解るから、坂のように成長していくでしょう。しかし子供は、突然に飛躍するから、聞いていないように思われても、結局、恐ろしい位聞いているのです。飛躍がいつくるかどうかわからないから、我慢できないで止めると、もしかすると明日、飛躍したかも知れないのに、水平線のままで終わってしまう。カバレフスキーを12回弾いた頃には、B君が、余りに相手にしてくれないので、嫌気がさしていたけれど、13、14回頃に急に興味を示し出した。もし、それでも解からなかった時、私は、200回でも弾いたかも知れません。そういう具合に、繰り返すと、いきなり子供は、何か持ってくるものです。

音楽の理解の仕方というのは、個々別々で、1人の人間が、今日聴くのと明日聴くのとでも違ふし、それでいいのだと思います。違ふ事がむしろ、その人の内的現実が実際に動いている証拠なのです。1人1人の子供に対する時に、自分自身の内的現実を、外から見える様にしてあげて下さい。自分の感動を他人に伝えるのに、一番技術的にもしっかりとしているのは指揮者です。教育の場に於ても、指揮者としてやる事が大切です。聴くことが出来るというより、実際に、現実にあるものとして触れることが出来るようにしてあげる、その上で、子供たちがそれと触れ合いを持って、どういう風に反応するかというのが、音楽の教育の一番大事な所だと思います。私達が、既に観念で硬直したまま、音楽を考えて、子供たちに渡して行くと、一番かわいそうなのは子供達であり、私達が思っている様な音楽文化、文化圏というのは、作れないような気がします。(文責 小松)

本格派ショッップ天神に誕生

日本楽芸社

(福岡支部のお世話をしております)

〒810 福岡市中央区天神2丁目6の26  
TEL 092 (713) 1625

ピアノ・オルガン・エレクトーン

ヲガタ楽器

(福岡県南支部のお世話をしております)

〒961 福島県白河市中町36の6  
TEL 02482 (3) 3270